

江戸蘭学界のリーダーとなった津山藩医・宇田川玄真には子どもがなく、43歳の時に養子を迎えています。今回はその養子となった榕菴の生い立ちから紹介することにしましょう。

寛政10年（1798）3月9日、榕菴は大垣藩医（江戸詰）・江沢養樹の長男として生まれました。養樹は宇田川玄真・玄真の2人に学んだ人で、玄真が宇田川家を相続する際には、その後押しをした人物です。母の安子も教養の高い女性で、子どもたちの教育にはとりわけ熱心でした。

榕菴は幼いころから利発だったようで、5歳のころ病気で高熱にうなされた時に、うわごとで唐詩を叫んだという逸話が残っています。また、夙や独楽といった遊びは好まず、一人で絵を描くことが好きな子どもだったといえます。特に蟹の絵が得意で、両親は来客があると蟹を描かせては自慢していました。

そんな榕菴に転機が訪れたのは13歳の時でした。玄真にその才能を見込まれ、洋学の名門・宇田川家の養子に迎えられることになったからです。当初榕菴は、厳格な玄真のもとで漢方医学や本草学（博物学）など基礎的な学問を学んで過ごしました。

榕菴が16歳になった文化11年（1814）、出島のオランダ商館長ヘンドリック・ゾーフ一行が將軍に拝謁するために江戸へやって来ました。この時玄真に従って彼らと面談した榕菴は、葉について質問したという記録があります。この出会いは榕菴に大きな刺激を与え、この後「本格的にオランダ語の勉強がしたい」と思うようになります。

## 筆 漫 覧 博 学 洋

### ～ 宇田川榕菴の生い立ち ～

その様子を見た玄真は「外国語を習得することは一生の大業だ。優れた学者になろうと思うのなら、ゆつくり成長することを嫌がってはいけない。六、七年後から勉強を始めても決して遅くはないだろう」と榕菴をたしなめました。オランダ語を学ぶ前に、まずは基礎教養である漢学をしっかり身に付けることが重要だと考えたからです。

しかし、榕菴のオランダ語への思いはますます熱くなるばかりです。そこで、玄真は説得をあきらめ、語学の天才といわれた馬場佐十郎のもとで学ばせることにしたのでした。

のちに榕菴は日本で最初の植物学や化学の本を刊行しますが、その大業の基礎となった実力は、この時から培われていったのです。



▲宇田川榕菴肖像画  
(武田科学振興財団杏雨書屋所蔵)

※透かしの家紋は右が眞作家、左が宇田川家のもの

## 2 月中のひとの動き

人口	109,448人 (前月比△152)		
男	52,178人 (同△70)		
女	57,270人 (同△82)		
世帯	43,742世帯 (同△56)		
転入	179人	転出	314人
出生	72人	死亡	89人

(3月1日現在)

広報つやまは、環境保護のため再生紙と大豆油インキを使用しています。読み終えた後はリサイクルにご協力ください



## つ・ぶ・や・き

### 編集室

「勝北風の子」とも「園」落成式を取材しました。北に横仙（那岐連山）を望み、南には思いっきり遊べる広い園庭、陽光があふれ、木材に優しく包まれる園舎内。部屋続きで行けるトイレ。もう一度、園児に戻って通いたいなあ…(´▽｀)

進級・進学の子供。新しい1年の始まりに、子どもたちはウキウキワクワクだけど、親は結構ハラハラドキドキさせられるものです。小学校入学早々、校内の小さな池に3度もはまった我が子…。中学では何をやらかすんだ？ (和)

ふと目を外に向けると、うっすらとピンクに色づく鶴山公園。「さくらまつり」に向けてだんだんと咲き誇っていくのでしょうか。でもこの広報紙が皆さんの手元に届くころには…。花も時も、あつと言う間に移ろうものです。(＆)

## つやま

TSUYAMA CITY Public Relations Magazine



編集・発行 (毎月10日発行)  
津山市総合企画部市長公室(市役所3階)  
〒708-8501 岡山県津山市山北520番地  
☎0868-23-2111(代) ☎0868-32-2152  
Eメール kouhou@city.tsuyama.okayama.jp

☆広報つやまはホームページで閲覧できます。  
<http://www.city.tsuyama.okayama.jp/>

